

## 編集後記

今年も『木簡研究』の編集後記を書く季節となった。今号は事例報告六三件、一九七七年以前の本簡一件、釈文の訂正と追加五件、合計六九件となった。昨年に比べると三〇件ほど減少し、少しく積み残しが増加した。これには個別に種々の事情があるようであるが、本簡学会としては可能な限り正確で迅速な資料の提供を目指したい。あわせて、論文二編、新刊紹介一編、コラム二編を掲載している。調査担当者の方々ははじめ、原稿をお寄せいただいた皆さんにお礼申し上げます。かくして本号は総ページ数で二四二頁となった。昨年の三四六頁と比べ少々うすくなったが、むしろこの程度の厚さが適当なのかもしれない。本簡学会の活動は、二〇周年記念図録の刊行、但馬特別研究集会の開催など、今後ますます盛んである。

さて、本号から、『木簡研究』の編集の仕方を大幅に変更することとなった。新しい編集のシステムでは、本簡学会の若手の幹事の方を中心となって原稿の整理・校正のチェックなどを行なっている。これは、昨年までのやり方では、事務局の置かれている奈文研の方々の負担が大きく、本簡学会と奈文研との境目をはっきりさせようとしたわけである。本年四月に、奈文研が、奈良国立文化財研究所から独立行政法人文化財研究所の奈良文化財研究所に組織変えになったこともある。そのため、二〇〇一年度の支出のうち、編集費

が大幅に超過することになった。会員の皆さんのご理解と、今後のいっそうのご支援をお願いする次第です。

そういう事情で、本号は、史料調査室の馬場基さんとともに、若手の幹事のうち、とくに鷲森浩幸さん・山本崇さん・岩宮隆司さんの活躍があつてはじめて刊行することができた。最初の試みで何とかと苦労をおかけしたが、ここに特記し、お礼の言葉にさせていだきたい。どうもありがとうございました。なお、この編集スタッフを「文殊の会」と称していた。もちろん「三人よれば文殊の知恵」の謂いである。

一九七九年の創立以来、幹事ならびに委員として、文字通り本簡学会を支えてこられた鬼頭清明さんが、本年二月二〇日に鬼籍に入られた。享年六一歳。今さら言うまでもなく、鬼頭さんは数多くの本簡の解説に従事されて、『木簡の社会史』（一九八四年）『古代木簡の基礎的研究』（一九九三年）『古代木簡と都城の研究』（二〇〇〇年）などの本簡に関する著作を著わされた。まさしく、日本の本簡研究を、その誕生から現在まで牽引され続けてこられたわけである。一時、体調をくずされたものの、つい最近まで本簡学会にて、にこやかな笑顔をお見かけしたところであつた。ここに謹んで哀悼の意を表しますとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

（西山良平）